受傷アスリートとそのチームメイトが持つ認識の明確化[†]

鈴木 郁 弥* 荒 井 弘 和**

Clarification of Recognition among Injured Athletes and Their Teammates[†]

Fumiya SUZUKI* and Hirokazu ARAI**

Abstract

It has been reported that injuries lead to psychological issues regarding human relationships while participating in sports. In particular, studies on the relationship between injured athletes and their teammates have reported that injured athletes perceive pressure from their teammates. In this study, we aimed to clarify the interpersonal recognition of injured athletes and their teammates. We conducted an investigation using a qualitative approach. Ninety-eight college student-athletes participated in this study, wherein an open-ended questionnaire was used. Written data were collected regarding the interpersonal cognition at the time of injury. The obtained data were categorized using the KJ method. According to the results, the cognition of a teammate regarding an injured athlete was categorized into 14 categories, such as “sympathy for the injured athlete”, “expected to return for the injured athlete”, “worry for the injured athlete”, “situational awareness of the injury”, and “opportunity to take the position of the injured athlete”. Additionally, the injured athlete’s prediction of cognition of a teammate was categorized into 12 categories, such as “expected to return for the injured athlete”, “forced to return for the injured athlete”, “worry for the injured athlete”, “suspicion of injured athlete’s sabotage”, and “disinterest toward the injured athlete”. From these results, it was suggested that teammates have cognition of worry and sympathy toward injured athletes, and they hope that injured athletes are cured and return to competition. In addition, it was observed that the injured athletes felt the cognition of peer-pressure in addition to the expectation of return from teammates. In the future, after collecting quantitative data, we need to examine it further by focusing on the difference between the cognition of injured athletes and their teammates.

Key words : Sports Injury, Peer Pressure, Prediction of Cognition, KJ Method, College Athlete

1. 緒 言

「スポーツには怪我がつきもの」という言葉がしばしば用いられるほど、アスリートにとって怪我は身近なものである。スポーツ場面にお

いて生じる怪我、すなわちスポーツ傷害は、パフォーマンスや競技成績のみならず、スポーツ活動への恐怖や嫌悪、発達・発育障害、後遺症による機能障害など、アスリートの競技人生や引退後の人生にまで大きな影響を及ぼす要因と

[†] 原稿受付 2016年8月22日 原稿受諾 2016年11月22日

* 法政大学研究開発センター 〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1

** 法政大学文学部 〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1

* Hosei University Research and Development Center, 2-17-1, Fujimi, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan (102-8160)

** Faculty of Letters, Hosei University, 2-17-1, Fujimi, Chiyoda-ku, Tokyo, Japan (102-8160)

なりうる¹⁾。アスリートや指導者もスポーツ傷害の脅威を感じていることが示されており、パフォーマンスにネガティブな影響を及ぼす要因として、アスリート、指導者ともにスポーツ傷害が最も重要であると捉えている²⁾。

しかしスポーツ傷害は、アスリートが最大限注意を払っていたとしても発生を完全に防ぐことは困難である。実際に、わが国では年間で40.5%もの大学生アスリートがスポーツ傷害を負っていることが報告されており³⁾、スポーツ傷害の発生を根絶することの困難さがうかがえる。さらに、スポーツ傷害の発生に関しては、その原因のうち18%が、心理的な要因によるものであることが示されており⁴⁾、スポーツ傷害は、アクシデントや不注意といった身体的・環境的要因だけでなく、日常的に感じているストレスや不安といった心理的要因とも関連していることが指摘されている。

スポーツ傷害に関しては、これまでは治療やリハビリテーションを前提とした知見が数多く集積されてきた⁵⁾。しかし実際の現場では、受傷アスリートが必ずしも傷害に対して適切な治療を行っていない場合もある。飯出他³⁾では、一年間に受傷経験があった40%のアスリートのうち4人に1人が、「受傷後、医療機関に受診していない」と回答したという結果が報告されている。また、その後の傷害の状況について、受診しなかった受傷アスリートのうちの37%が「痛いがプレーできる」と回答したという結果も示されている。すなわち、傷害が完治していない状況にもかかわらず、何らかの理由によって受傷アスリートは適切な治療よりも練習や試合といった競技活動を優先してしまうという現状があると報告されており、傷害に対して適切な治療を行わず、受傷したまま競技に復帰してしまう選手が存在していることが、この結果によって示されている。

アスリートは傷害を負った際、様々な問題や困難に直面することになるが、その一つに心理的な問題がある。受傷したアスリートが抱える心理的な問題を扱った先行研究では、アスリー

トが受傷中に自分のポジションをチームメイトに奪われてしまう危険性を感じ、否定的な感情を表す場合がある⁶⁾ことや、傷害を抱えながら試合や練習に参加することに対してストレスを感じている⁷⁾ことが示唆されている。つまり、受傷アスリートは傷害そのものだけでなく、周囲の対人的な要因によっても、ネガティブな心理的反応が引き起こされることが指摘されている。このような対人関係によって引き起こされる心理的な問題を解消することは、受傷アスリートの心理的健康に有益であると考えられるが、具体的な検討はほとんど行われていないのが現状である。

こうした問題を取り上げている研究は非常に数が少ないものの、Nixon⁸⁾およびKroshus et al.⁹⁾において、受傷アスリートの対人関係によって引き起こされる心理的な問題に関する検討が行われている。Nixon⁸⁾では大学生アスリートを対象として、指導者、チームメイト、アスレチックトレーナーという三者からそれぞれ与えられる言葉がけに対して、受傷アスリートはプレッシャー、落胆、共感という感覚をどの程度持っており、それぞれに対してどのように対処するのかについて検討されている。結果として、受傷アスリートの40%が、チームメイトからのプレッシャーを感じていることや、チームメイトからのプレッシャーがアスレチックトレーナーに対する回避欲求に影響を及ぼすことが示された。このことから、受傷アスリートの約半数はチームメイトからの言葉がけをプレッシャーに感じていることが示されている。また、復帰や練習を求められていると考えるために、身体的なケアや健康管理を担当しているアスレチックトレーナーとの接触を回避してしまう可能性があることが示唆されている。

また、Kroshus et al.⁹⁾は、大学生アスリートを対象に脳震とうを負った際の周囲への報告意思に対して、脳震とうの経験や知識、その後のプレー継続経験、周囲からのプレッシャーといった要因がどの程度影響を及ぼすかを検討している。その結果として、チームメイトからブ

レッシャーを受けるほど脳震とうを報告しなくなる事が示された。また、受傷アスリートが脳震とうに関する経験や知識を持っていたとしても、アスリートが周囲の人間に対して報告をしようとする意思は増加しないことも示されている。つまり、脳震とうを早期に発見・処置するための効果的な手段である、受傷したアスリート本人からの自己報告を促すためには、脳震とうの危険性に関する知識をアスリートに対して教えるよりも、チームメイトからのプレッシャーを低減させることが重要であるということが明らかとなった。

このように、チームメイトが持つ、「受傷アスリートに対する認識」（以下本論では、「認識」という語を用いる）が、先行研究において扱われている。そして、チームメイトという存在が受傷アスリートに対して影響を与える要因となっており、チームメイトが受傷アスリートに与えるプレッシャーは、受傷アスリートの治療に対する意思や行動を阻害する要因であることが、2つの研究によって明らかにされている。

しかし、これらの研究⁸⁾⁹⁾において扱われているのは、チームメイトがどのような認識を持っていると受傷アスリート自身が感じるかという「チームメイトの認識に対する推測」（以下本論では、「推測」という表現を用いる）であり、チームメイトの認識については、先行研究では全く言及されていないという問題点がある。スポーツ傷害以外におけるアスリートの二者間の関係性に着目した研究では、アスリートとコーチの相互的な関係性を明らかにするため、アスリート・コーチの両者を調査対象として質問紙調査を行い、比較検討が行われている²⁾。スポーツ傷害発生時における受傷アスリートとチームメイトの関係性においても、両者の関係性に着目して検討を行うことによって、より包括的、多角的な知見を収集することができると考えられるため、チームメイトの認識と、受傷アスリートの推測という両者の立場から検討を行う必要があるだろう。

また、先行研究⁸⁾⁹⁾では、受傷アスリートの

「プレッシャー」「落胆」「共感」という3種類の推測に限定されており、それ以外の種類については言及されていないという問題もある。確かに、受傷アスリートの治療に対して影響を与える要因を明らかにしたことには大きな意義がある。しかしそもそも、受傷アスリートとチームメイトの間で生起している認識や推測の種類について、これまでの知見では明らかにされていない。まずは受傷アスリートやチームメイトが持つ認識の種類を網羅したうえで、それぞれの認識の程度や受傷アスリートの治療に対する影響を検討する必要があるだろう。

そこで本研究では、対人関係によって生じる受傷アスリートの心理的な問題を解消するための足がかりとして、まずは受傷アスリートとチームメイトの関係性に着目し、受傷アスリートとチームメイトが、それぞれ互いに考える認識の種類を明確化することを目的とした。具体的には、大学生アスリートを対象とした自由記述形式の質問紙調査を実施し、受傷アスリートの認識とチームメイトの推測について質的データを収集し、認識や推測の種類を明確化する。

2. 方 法

2.1 調査対象者

首都圏にある4年制大学の体育会部活動に所属する大学生98名を調査対象とした。本研究における調査対象者をこのように選定した理由として、大学生アスリートは他の年齢層に比べてスポーツ経験年数が多く、対象者自身が傷害を負ったり、チームメイトが傷害を負うという状況を経験したことがある可能性が高いことから、より具体的かつ多様性のある回答を得ることができると判断したためである。

2.2 調査時期

調査時期は2014年7月であった。

2.3 調査項目

(1)属性：性別、年齢、学年、所属部活名、現在行っているスポーツの経験年数、部活内の

地位(レギュラー・準レギュラー・非レギュラー)について回答を求めた。

(2) 痛みの評価スケール: 対象者が現在抱えている傷害の程度を測定するため、本研究では、傷害によって引き起こされる主観的な身体の痛みについて、臨床場面において身体的な疼痛を測定するための尺度として広く用いられている Numerical Rating Scale を使用した。具体的には、現在抱えている痛みについて、0 (痛みなし) - 10 (耐えられない痛み) をそれぞれ両端に設定し、0 - 10 の 11 段階で評価を求めた。

(3) 受傷アスリートの認識: 受傷アスリートの認識にどのようなものがあるのかを明確化するため、想定法による回答を行ってもらった。具体的には、「あなたの周りに、怪我や身体の痛みを抱えているために十分な練習ができない選手がいるとき、あなたはその選手に対してどのようなことが思い浮かびますか」という教示を行い、自由記述形式で回答を求めた。

(4) チームメイトの推測: チームメイトの推測にどのようなものがあるのかを明確化するため、想定法による回答を行ってもらった。具体的には、「あなたが怪我や身体の痛みを抱えているために十分な練習ができないとき、チームメイトは、あなたに対してどのように思っていると感じますか」という教示を行い、自由記述形式で回答を求めた。

2.4 手続き

大学の講義開始前を利用して質問紙の配布・回収を行った。その際、参加同意書を事前に配布し、研究参加の同意を得た上で、質問紙の配布・回収を行った。なお、参加同意書には、本研究の目的や所要時間、回収した質問紙やデータの取り扱い方法、本研究から得られる結果のフィードバック方法、研究者の情報と連絡先について明記した。そして、対象者が回答をいつでも中断できる権利を明記し、倫理的な配慮を行った。

なお本調査は、法政大学文学部心理学科・心理学専攻倫理委員会において審査を受け、研究

実施の承認を得た上で実施された。

2.5 分析方法

自由記述によって得られた回答を整理・集約する方法として、本研究では KJ 法¹⁰⁾を採用した。KJ 法とは、「紙切れ作り」「グループ編成」「A 型図解化」「B 型文章化」という 4 つのステップによって、質的なデータを分類し新たな理論を「発想」することを主眼とした定性的分析であり、質的研究において広く用いられている手法である。このうち「A 型図解化」「B 型文章化」については、編成されたグループごとの関係性や因果性を構築するために行われるが、本研究では、認識の種類を明確化するという研究目的を考慮し、この 2 つのステップについては省略した。よって本研究では、KJ 法の 4 つのステップのうち、1 つ目の「紙切れ作り」および 2 つ目の「グループ編成」に基づいて分析作業を行った。報告された回答を改変することなく 1 つずつ紙切れにした上で、作業者間で議論を行い、研究目的に鑑みて、同意にいたるまで吟味・検討し、それらの紙切れをカテゴリに整理・集約した。議論の際に集約が困難だと判断された回答については、無理に他のカテゴリに集約することはせず、独立したカテゴリに集約した。意味が不明瞭な回答や目的にそぐわない回答は分析の過程で除外した。なお、これらの作業は心理学を専攻とする大学教員 1 名と心理学専攻の大学院生 1 名、心理学を専攻し体育会部活動に所属する大学生 2 名の計 4 名によって行われた。

3. 結果

3.1 対象者の人口統計的データ

98 名を対象に質問紙を配布し、回収率は 100% であった。分析対象となった 98 名のうち、男性は 72 名、女性は 26 名であり、平均年齢は 18.72 歳 ($SD = 0.78$) であった。対象者の所属部活動は、アメリカンフットボール部 12 名、硬式野球部 11 名、フェンシング部 9 名、ボート部 8 名、レスリング部 7 名、スケート部 7 名、卓

球部5名, バドミントン部4名, パレーボール部4名, ボクシング部4名, 弓道部4名, 剣道部4名, ゴルフ部3名, バスケットボール部3名, 柔道部3名, 自転車競技部2名, 重量挙げ部2名, 水泳部2名, 相撲部2名, スキー部1名, 空手部1名であった。対象者が現在行っているスポーツの競技継続年数は平均8.52年 ($SD = 4.16$) であり, 部内の地位については, レギュラーが24名, 準レギュラーが22名, 非レギュラーが52名であった。現在抱えている身体的な痛みの程度は平均3.99 ($SD = 2.85$) であった。

3.2 チームメイトの認識の分類

チームメイトの認識について, 110の自由記述回答が得られた。このうち7の回答については, 不明瞭な内容や目的にそぐわないと判断されたため, これらの回答を除いた103の回答を整理・集約した。集約された結果の一部をTable 1に示す。

結果として, 【受傷者に対する同情】【受傷者の復帰への期待】【受傷者に対する心配】【受傷者の怪我の状況把握】【受傷者の地位を奪うチャンス】【受傷者に対する休息の推奨】【受傷者に対する行動的援助】【受傷者に対する羨望】【受傷者に対する心理的援助】【受傷者に対する復帰の強要】【受傷者の対処方略に対する働きかけ】【受傷原因の追究】【受傷に関する発想の転換】【受傷者に対する無関心】という14のカテゴリが得られた。

各カテゴリに含まれた具体的な回答について, 【受傷者に対する同情】には, 「大変そうだな」「かわいそう」など, 受傷したアスリートへの思いやりを表す回答がまとめられた。【受傷者の復帰への期待】には, 「早く治してほしい」「早くまた一緒に練習したい」など, 受傷アスリートが再度練習に復帰することを望み願う回答が分類された。【受傷者に対する心配】には, 「大丈夫かな」「心配する」など, 受傷アスリートを案ずる回答が含まれた。【受傷者の怪我の状況把握】には, 「どこが痛いのかな」「怪我は大きいのか, 小さいのか, すごく心配」など,

受傷アスリートの抱える傷害そのものに興味を持っている回答が集約された。【受傷者の地位を奪うチャンス】には, 「ここで差をつけてやる」「ケガをしてレギュラーを取るチャンス」など, 受傷アスリートが練習に参加できない中, 自分が努力することで受傷アスリートとの実力差をつけたいという意思が表された回答が含まれた。【受傷者に対する休息の推奨】は, 「きちんと休んだ方がいいのではないかな」「無理をせずしっかりと治してから練習に参加すればよいと思う」など, 受傷アスリートの傷害を完治させるため, 一時的に休息を取ることを勧める回答が分類された。【受傷者に対する行動的援助】は, 「その人の分まで仕事をしてあげる」「助けてあげる時があれば助けよう」など, 受傷中の競技生活で何らかの障害があった場合に, 行動による手助けをしてあげようとする回答が類型化された。【受傷者に対する羨望】には, 「楽そうだと思う」「サボりなのかな」など, 傷害を抱えているために通常通りの練習メニューをこなすことができないアスリートに対して羨ましく感じている回答が含まれた。【受傷者に対する心理的援助】は, 「とりあえず励ます」「怪我してる人に優しく接する」など, 受傷アスリートが苦痛な心境であると推察し, 心理的なケアをしようとする回答にまとめられた。【受傷者に対する復帰の強要】は, 「早く練習をしてほしい」「100%プレーできるなら合流して」など, 傷害の治療よりも練習場面への復帰を強く求める回答で構成された。【受傷者の対処方略に対する働きかけ】には, 「言ったほうがいいんじゃないかな」「医者 of 言うことを聞かせる」など, 受傷アスリートに対して具体的な方略を提案しようとする回答が含まれた。【受傷原因の追究】は, 「やりすぎではないかな」「自己管理ができていない」のように, アスリートが傷害を負ってしまった原因について考察をしている回答にまとめられた。【受傷に関する発想の転換】は, 「苦しさをバネに頑張してほしい」「休むことから学べることもあると思う」のように, 受傷したという事実について, ネガティブな影響ばかり

Table 1 チームメイトの認識の分類結果

カテゴリ名 (回答数)	主な回答 (重複していた回答の数)
受傷者に対する同情 (18)	大変そうだな (3) 大変だなと思う (2) かわいそう (2)
受傷者の復帰への期待 (17)	早く治してほしい (4) ゆっくり休んでもらいたい (2) 早くまた一緒に練習したい (2)
受傷者に対する心配 (14)	大丈夫かな (4) 心配する (3) 心配 (3)
受傷者の怪我の状況把握 (10)	どこが痛いのかな どの程度痛いのか気になる 怪我は大きいのか、小さいのか、すごく心配
受傷者の地位を奪うチャンス (8)	ここで差をつけてやる ケガをしてレギュラーを取るチャンス 同期の場合ここで差をつける
受傷者に対する休息の推奨 (7)	きちんと休んだ方がいいのではないかな ひどくなる前に治せ 無理をせずしっかりと治してから練習に参加すればよいと思う
受傷者に対する行動的援助 (6)	その人の分まで仕事をしてあげる 助けてあげる時があれば助けよう 手伝ってあげる
受傷者に対する羨望 (4)	楽そうだと思う (2) つらい練習をしているならせこいと思う サボりなのかな
受傷者に対する心理的援助 (3)	とりあえず励ます 声かける 怪我してる人にやさしく接する
受傷者に対する復帰の強要 (3)	早く治せよ 早く練習をしてほしい 100%プレーできるなら合流して
受傷者の対処方略に対する働きかけ (3)	言った方がいいんじゃないかな 病院に行ってしっかり見てもらおう 医者言うことを聞かせる
受傷原因の追究 (2)	やりすぎではないかな 自己管理ができていない
受傷に関する発想の転換 (2)	苦しさをバネに頑張ってほしい 休むことから学べることもあると思う
受傷者に対する無関心 (2)	とくに思いうかばない 特に興味を持たないので何も思わない
その他	十分なパフォーマンスもできなくてかわいそうだと思うけど すごいと思う 練習メニューは何してるのかな しょうがない あえて厳しく

でなくポジティブな影響もあるのではないかと考える回答が分類された。【受傷者に対する無関心】には、「特に思いうかばない」「特に興味を持たないので何も思わない」のように、受傷アスリートや傷害についての印象が特にないことを報告する回答が集約された。また、これらのカテゴリに当てはまらなかったものとして、「十分なパフォーマンスもできなくてかわいそうだと思うけどすごいと思う」「練習メニューは何してるのかな」「しょうがない」「あえて厳しく」という回答が挙げられていた。

3.3 受傷アスリートの推測の分類

受傷アスリートの推測について、109の回答が得られた。このうち、不明瞭な内容や目的にそぐわない回答が6あったため、これらの回答を除いた103の回答を整理・集約した。集約された結果の一部をTable 2に示す。

結果として、【受傷者の復帰への期待】【受傷者に対する復帰の強要】【受傷者に対する心配】【受傷者に対するサボタージュの疑念】【受傷者に対する無関心】【受傷者の怪我の状況把握】【受傷者に対する否定的評価】【受傷者に対する同情】【受傷者に対する休息の推奨】【受傷者に対する怪我に配慮した練習の推奨】【受傷原因の追究】【受傷者に対する最善の努力の推奨】という12のカテゴリが得られた。

【受傷者の復帰への期待】には、「早く治してほしい」「早く復活してほしい」など、チームメイトから復帰を望まれ期待されていると推察する回答が含まれた。【受傷者に対する復帰の強要】は、「早く治せ」「早く治して復帰しなさい」など、いち早い完治や復帰を強く望まれており、半ば強要されていると推察している回答のまとまりとなった。【受傷者に対する心配】は、「心配してくれていると思う」「心配している」など、チームメイトから身を案じられていると想像する回答が類型化された。【受傷者に対するサボタージュの疑念】は、「サボっている」「サボるなと思われる」など、傷害を負っているために十分な練習ができないと、チーム

メイトは自分が練習に全力を尽くしていないと感じているのではないかと考える回答によって構成された。【受傷者に対する無関心】には、「何も思っていない」「無関心」など、チームメイトは受傷中の自分や傷害に対して具体的な印象を持っていないのではないかと推察する回答が要約された。【受傷者の怪我の状況把握】には、「どこか痛いのか」「ほんとに痛いのかな」など、チームメイトは自分が負っている傷害についての興味や疑問を持っているのではないかと推察する回答が分類された。【受傷者に対する否定的評価】には、「少し視線が冷たく感じることもある」「ヘタレ」など、チームメイトから否定的な印象や評価を持たれているのではないかと想像する回答が含まれた。【受傷者に対する同情】には、「かわいそう」「かわいそうだけどしょせん他人事」など、チームメイトから心的な距離を置かれていることを感じつつも、傷害を負っているという境遇に対しては同情をしてくれているのではないかと考える回答が含まれた。【受傷者に対する休息の推奨】には、「休ませたほうがいいと感じている」「全力でできないのならしょうがないのでゆっくり休んでほしい」など、治療のために練習への参加を中断し、休息を取ったほうがよいと考えているのではと推察する回答がまとめられた。【受傷者に対する怪我に配慮した練習の推奨】は、「他のトレーニングをするチャンスだ」「治るまでは他のメニューをして頑張してほしい」など、通常の練習メニューはこなすことができないということを理解してくれており、受傷アスリートに対して用意される専用の練習メニューを頑張してほしいと思われると推察する回答によって構成された。【受傷原因の追究】には、「うまく付き合わなくてはならないケガだからな」「ちゃんとストレッチをしてないからだ」など、チームメイトが受傷した原因や傷害の特徴などに対して印象を持っていると想像する回答が含まれた。【受傷者に対する最善の努力の推奨】には、「できることはしとけ」「怪我をしてもできることはしっかりやってください」など、受傷

Table 2 受傷アスリートの推測の分類結果

カテゴリ名 (回答数)	主な回答 (重複していた回答の数)
受傷者の復帰への期待 (19)	早く治してほしい (5) 早く復活してほしい (2) 早く治して早く復帰してほしい (2)
受傷者に対する復帰の強要 (14)	早く治せ (3) 早く治せよ (2) 早く治して復帰しなさい
受傷者に対する心配 (11)	心配してくれている (3) 心配している (2) 心配していると思う
受傷者に対するサボタージュの疑念 (10)	サボっている (2) サボるなと思われる サボっていると思う
受傷者に対する無関心 (10)	何も思っていない (2) 特に何も思っていないと思う (2) 無関心 (2)
受傷者の怪我の状況把握 (7)	どこか痛いのか (3) どこか痛いのか心配している ほんとに痛いのかな
受傷者に対する否定的評価 (6)	少し視線が冷たく感じることもある ヘタレ 自分に甘いやつだな
受傷者に対する同情 (6)	かわいそう (3) かわいそうだなと思っていると感じる かわいそうだけどしょせん他人事
受傷者に対する休息の推奨 (5)	しっかり休んだ方がいいんじゃない?と感じる 休ませた方がいいと感じている 全力でできないのかもしれないのでゆっくり休んでほしい
受傷者に対する怪我に配慮した練習の推奨 (4)	他のトレーニングをするチャンスだ 治るまでは他のメニューをして頑張ってもらいたい 体づくりをさせる
受傷原因の追究 (4)	うまく付き合わなくてはならないケガだからな 肩は前から故障持ってるからな ちゃんとストレッチをしてないからだ
受傷者に対する最善の努力の推奨 (2)	できることはしとけ 怪我をしていてもできることはしっかりやってください
その他	自分が目立つチャンス こいつ練習できなくていいな 仕方ない 接してもらっていないのでわからない わからない

中であっても、チームメイトのサポートなどを行うことによってチームへの積極的な参加をするべきだとチームメイトが考えているのではないかと推察する回答が集約された。また、これらのカテゴリに当てはまらなかったものとして、「自分が目立つチャンス」「こいつ練習できなくていいな」「仕方ない」「接してもらっていないのでわからない」「わからない」という回答が挙げられていた。

4. 考 察

4.1 チームメイトの認識

KJ法によって分類されたチームメイトの認識に関して、【受傷者に対する同情】【受傷者の復帰への期待】【受傷者に対する心配】といった、受傷アスリートを気遣う回答が特に多く見られた。このことから、チームメイトは心配や同情の認識を持っており、また傷害の完治や競技への復帰を願う気持ちも持っていることがうかがえる。そのうえで、【受傷者の怪我の状況把握】【受傷者に対する行動的援助】【受傷者に対する心理的援助】など、傷害の具合を正しく理解しようという認識を持っており、心理的・行動的なサポートを積極的に行うことで、受傷アスリートの競技復帰を手助けしたいと考えていることが示唆される。また、【受傷に関する発想の転換】のように、受傷することでのみ得られる経験や、そこから学ぶことのできる可能性があることから、傷害はアスリートにとってネガティブな要因となるだけではなく、むしろポジティブな要因としても活用できると考えるチームメイトも存在することがうかがえる。ただしこれは、チームメイトが他人事として回答している可能性もあるため、傷害をポジティブに捉えていたチームメイト自身が受傷した際にも同様に考えるかどうかは、不明であると留意する必要があるだろう。

その一方で、【受傷者の地位を奪うチャンス】【受傷者に対する羨望】のように、満足に練習をこなすことができない受傷アスリートに対して羨ましいと感じたり、自分が努力することに

よって部内の地位を奪取しようと考えていることも示された。そして、【受傷者に対する復帰の強要】のように、通常の練習をこなすことができない受傷アスリートに対して不満を感じたり、チームとしてのパフォーマンス低下を危惧すると、チームメイトは復帰を強要する認識が芽生えることが示唆される。

4.2 受傷アスリートの推測

次に、受傷アスリートの推測の分類結果だが、今回の調査では【受傷者の復帰への期待】【受傷者に対する復帰の強要】という相反する2つの推測が特に多く見られた。このことから、受傷アスリートは、チームメイトが復帰に関して気にかけっていると推察していることが示唆される。そして、チームメイトから【受傷者に対する心配】や【受傷者に対する同情】を向けられていると感じつつも、【受傷者に対するサボタージュの疑念】【受傷者に対する否定的評価】のように、練習を満足にこなすことができないことに対して否定的に見られていると推察していることが示された。

また、【受傷者の怪我の状況把握】【受傷原因の追究】のように、傷害そのものに関する推測を持っており、【受傷者に対する休息の推奨】【受傷者に対する怪我に配慮した練習の推奨】【受傷者に対する最善の努力の推奨】のように、傷害の具体的な対処方略に関する推測を持っていることが示唆される。

4.3 チームメイトの認識と受傷アスリートの推測の比較

チームメイトの認識と受傷アスリートの推測を比較してみると、【受傷者の復帰への期待】【受傷者に対する復帰の強要】【受傷者に対する心配】【受傷者に対する同情】といった、受傷アスリートの復帰や精神的な援助に関する回答や、【受傷者の怪我の状況把握】【受傷者に対する休息の推奨】【受傷原因の追究】といった、傷害そのものに関する回答が共通して見られた。このことから、チームメイトは受傷アス

リートに対して、精神的な気遣いや怪我そのものに対して関心を持っており、受傷アスリートは、そうしたチームメイトの認識をおおむね正しく推察していることが示唆される。

また、チームメイトの認識においてのみ得られたカテゴリは【受傷者の地位を奪うチャンス】【受傷者に対する羨望】【受傷に関する発想の転換】【受傷者に対する心理的援助】【受傷者に対する行動的援助】であり、受傷アスリートの推測においてのみ得られたカテゴリは【受傷者に対するサボタージュの疑念】【受傷者に対する否定的評価】【受傷者に対する怪我に配慮した練習の推奨】【受傷者に対する最善の努力の推奨】であった。このうち【受傷者の地位を奪うチャンス】【受傷者に対する羨望】【受傷に関する発想の転換】【受傷者に対するサボタージュの疑念】【受傷者に対する否定的評価】といったカテゴリは、練習を満足に行うことができない状況に関する認識であり、チームメイトは受傷アスリートが練習を行うことができないという状況を見て、「楽しそうだと思う」という【受傷者に対する羨望】や、受傷アスリートを追い抜き【受傷者の地位を奪うチャンス】を感じていた。一方、受傷アスリートはチームメイトから【受傷者に対するサボタージュの疑念】【受傷者に対する否定的評価】といった否定的な評価をされていると考えており、傷害の影響で自分の評価が悪くなってしまうことを推察していた。これらのカテゴリは、部内での評価や地位が変動することに関する認識という点において共通していると考えられる。またチームメイトは、受傷アスリートという存在が部内の評価や地位といった基準に影響を与える要因だと考えており、チームメイト自身のモチベーションにも関与することが、この結果から示唆することができる。

そして、【受傷者に対する心理的援助】【受傷者に対する行動的援助】【受傷者に対する怪我に配慮した練習の推奨】【受傷者に対する最善の努力の推奨】といったカテゴリは、受傷アスリートや傷害の援助に関する回答である。受傷

アスリートとしては、自分の傷害についてチームメイトから正しく理解されていると感じており、「できることはしとけ」といった【受傷者に対する最善の努力の推奨】をすることや、「他のトレーニングをするチャンスだ」といった【受傷者に対する怪我に配慮した練習の推奨】などの具体的な提案をチームメイトが考えていると推察していた。一方、チームメイトは受傷アスリートに対して「その人の分まで仕事をしてあげる」や「とりあえず励ます」といった、行動的・心理的な援助を通じて受傷アスリートを気遣おうと考えていた。これらの回答は、援助の認識があるという点において共通しているといえるだろう。

ただし、チームメイトが持っていた援助の認識には、受傷アスリートや傷害に対する具体的な援助よりも、「とりあえず励ます」「助けてあげる時があれば助けよう」といった、抽象的な表現が多く含まれていた。アスリートが受傷した際、通常とは異なるメニューで練習に参加することがある。また、受傷アスリートは否定的な感情やストレスを感じてしまう場合がある⁶⁾⁷⁾とも言われている。こうした状況に置かれることで、受傷アスリートとチームメイトの関わりが減少し、受傷アスリートが求めている具体的な対応や援助をチームメイトが正確に把握できない状況生まれている可能性が考えられる。よって、受傷アスリートに対して、より具体的に受傷アスリートのニーズに沿った援助をチームメイトが行うためには、こうした状況を改善する必要があるかもしれない。

4.4 本研究の限界点と今後の展望

本研究では想定法によって調査が行われており、実際に受傷している状況で測定されているわけではない。よって今後は、実際の受傷アスリートとそのチームメイトに対しても同様の調査を行うことで、より正確な実態が反映された知見を示す必要があるだろう。また本研究では、受傷アスリートやチームメイトの受傷状況や過去の受傷経験に関する指標が測定されてい

ない。しかし実際には、こうした経験によって想起される認識が変わる可能性は十分に考えられる。よって今後の調査では、傷害に関する具体的な項目を測定し、受傷経験によって認識に違いが見られるかを検討することも必要であると考えられる。

今後は、本研究で得られた結果を元に質問項目を作成し、チームメイトの認識と受傷アスリートの推測における定量的なデータを収集することで、両者の差異を定量的に検討することが期待される。また、受傷アスリートの個人特性や所属する集団の特性、チームメイトとの関係性といった要因との関係性について検討することも望まれる。

5. 結 論

本研究の目的は、受傷アスリートとチームメイトの両者に生じる認識について質的な手法を用いて類型化することであった。本研究では、自由記述形式で収集したテキストデータをKJ法によって整理・集約し、受傷アスリート・チームメイトがそれぞれ互いに持つ認識を分類した。結果として、【受傷者に対する同情】【受傷者の復帰への期待】【受傷者に対する心配】【受傷者に対する無関心】などの認識に分類された。また、受傷アスリートだけでなくチームメイトに対しても同様の調査を行ったことにより、受傷アスリートとチームメイトがそれぞれに持つ認識の特徴や、双方の認識における意味づけの違い、一方的な推測が行われていることなども明らかとなった。

謝 辞

本研究を行うにあたり、法政大学文学部の吉村浩一先生および渡辺弥生先生には、多大なるご助力を頂きました。この場をお借りして感謝の意を表します。

参 考 文 献

- 1) 青木邦男, 松本耕二; スポーツ外傷・障害と心理社会的要因, 山口県立大学看護学部紀要, Vol.3, pp.9-19, 1999.
- 2) Ruiz-Tendero G. and Martín J. J. S.; Psycho-social factors determining success in highperformance triathlon: Compared perception in the coach-athlete pair, Perceptual and Motor Skills, Vol.115, No.3, pp.865-880, 2012.
- 3) 飯出一秀, 他; 大学スポーツ選手におけるスポーツ外傷・障害の現状と対策-第2報-, 環太平洋大学研究紀要, Vol.5, pp.117-124, 2012.
- 4) Smith A. M., et al.; Emotional responses of athletes to injury, Mayo Clinic Proceedings, Vol.56, pp.38-50, 1990.
- 5) 直井愛里; スポーツ傷害における心理学, 近畿大学臨床心理センター紀要, Vol.2, pp.35-40, 2009.
- 6) Podlog L. and Eklund R. C.; A longitudinal investigation of competitive athletes' return to sport following serious injury, Journal of Applied Sport Psychology, Vol.18, No.1, pp.44-68, 2006.
- 7) Mellalieu S. D., et al.; Competition stress in sport performers: Stressors experienced in the competition environment, Journal of Sports Sciences, Vol.27, No.7, pp.729-744, 2009.
- 8) Nixon L. H.; Social pressure, social support, and help seeking for pain and injuries in college sports networks, Journal of Sport and Social Issues, Vol.18, No.4, pp.340-355, 1994.
- 9) Kroshus E., et al.; Concussion under-reporting and pressure from coaches, teammates, fans, and parents, Social Science and Medicine, Vol.134, pp.66-75, 2015.
- 10) 川喜田二郎; 続・発想法-KJ法の展開と応用-, 中央公論新社, 1970.